

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

保護者との繋がり～情報発信を通して～／南陽市立赤湯幼稚園

子どもたちの姿を保護者にどのように情報発信していますか？情報発信を工夫して、「科学する心」がどのような姿なのか、保護者に具体的な姿として伝えることで、保護者の理解が得られます。そして、園と家庭の生活が繋がり、子どもたちの体験がより豊かになることが期待できます。

今回は、子どもたちの姿を丁寧に保護者に伝え、子どもたちの変容や成長を共有する工夫をしている園の事例をご紹介します。



● カエルになるところを見たい！／5歳児

ダンゴムシをクラスで飼育し、図鑑で調べたり、ダンゴムシの住み処を作ったりして興味・関心を深めた子どもたちは、毎日世話を続けていた。

✦ オタマジャクシを迎える

- オタマジャクシを飼える話が舞い込んできた。子どもたちに尋ねてみると…。「見たい！」「欲しい！」「カエルになるところを見たい！」などという答えが返ってきた。
- 前回、飼育の途中で、オタマジャクシを死なせてしまった経験があるので、子どもたちも保育者も「よし！今度こそ」と言う強い思いで新しいオタマジャクシを迎える。

✦ 世話をしながら…

- 頭を寄せ合い、観察する子どもたち。

子ども：「おっかいね！」
子ども：「目、小さい！」「かわいいね」
子ども：「エサ、食べてる！！」
子ども：「大きくなってね！」

- 毎日エサをやったり水を足したりしながら自分たちで交代で世話をを行う。飼育ケースは日の当たらない廊下側に置くように配慮する。



✦ 足が出てるよ！

子ども：「あっ！後ろの足出てるよ！」
保育者：「本当に見えるの？」
子ども：「前足、見えた！？」
子ども：「緑になった！」
子ども：「触ってみたいな…」

- そして、保育者と一緒にオタマジャクシをそっと触る機会をつくった。

子ども：「ヌルヌルしてる」
子ども：「私も触ってみたい！触った！！ツルツルしてる！」

- 保育者は、子どもと共に観察、驚きや発見を共感できるようにした。



✿ 子どもの姿を発信

- 小さな生き物と関わることに真剣に取り組む、成長した子どもたちの姿を担任だけが見ていてはもったいない！と、積極的にクラス便りを通して保護者へ発信。「子どもってかわいい！面白い！」をたくさん共感したい！という担任の思いを発信したことで、家庭でも話題にしてもらうことができ、子どもたちの励みや自信にも繋がると考えた。



クラス便り（画像クリックでPDFが開きます）

✿ 保護者の姿

- 関心をもった保護者が、保育室へ足を運んでくれるようになる。「うわー」と興味をもって見ている保護者や、「うわー」と言いながら、苦手な様子の保護者もいる。「初めて見ました！！」と言う保護者もいた。
- 子どもと登園後に、朝から響く保護者の正直な反応の声は、保育者も嬉しく感じた瞬間だった。保護者の疑問に答えながら、コミュニケーションの場にしていった。

✿ オタマジャクシがカエルになったら

- オタマジャクシがカエルになる前に、子どもたちの話し合いの場を作ったり、[絵本「おたまじゃくしの101ちゃん（作・絵：かこさとし/出版社：偕成社）」](#)を読み聞かせたりする。

子ども：「カエルになったら金魚のエサは食べない」
子ども：「生きた虫を食べる」
子ども：「跳ぶよ！脱走する…逃げたら捕まえられるかな…」
子ども：「水がない所だったら死ぬよ」



- 絵本で、カエルの敵がいることを知った子どもたち…。ある日、いつも物静かなSちゃんが、「うちの近くの田んぼに連れてってあげる」と言い出した。
- すると、他の子どもたちも「いいねー！」と大賛成！「カエルを敵から守るぞ！」ここから、“安全な田んぼ”大作戦が始まった！
「ぼくんちの田んぼは、安全だよ！」
「お願いね！」「大きくなってね！」「元気でね！」
- みんなで近くの田んぼや川に一匹残らず返すことができた。

✿ 実践を振り返って

- ダンゴムシの飼育から、クラス全体に生き物への関心が深まった。図鑑で調べることの楽しさも味わう。調べることで知識の広がりや、次の活動への意欲に繋がった。飼育をする楽しさと同じくらいに、責任があることを知ったことで、より大切に生き物のことを考えて飼育する姿が見られるようになった。
- 飼育とは「命を繋いでいくこと」「守ってあげること」「どんな小さな生き物にも、命があり家族がいること」を、オタマジャクシたちは子どもたちに気付かせてくれた。そして子どもたちは、オタマジャクシの立場になって考えることがで

きるようになっていった。

- 自分たちで飼育する環境を考えたり、“安全な田んぼ”に放そうと考えた事は、オタマジャクシの小さな命の先を見通した思いやりの気持ちが生まれたからと考える。その気持ちが生まれたのは、自分たちで主体的に飼育を行ってきたからこそと考えた。
- クラス便りでの保護者への情報発信は、保護者も飼育物への関心を高めるきっかけになり、保育室に見に来てくれたり、家庭で話題にしてもらったりすることができた。また、園と保護者との繋がりを深めることに結びついた。保育者が、楽しみながら保育の情報発信をすることは、保護者の園の保育への理解を深めたり協力を得たりすることに繋がり、子どもの感性を育む保育の一つの工夫になるのではないかと考える。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム
幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」